



Division of Community Collaboration
産学官等連携推進本部 地域貢献部門

Annual Report 2005

平成 18 年 3 月

国立大学法人 電 気 通 信 大 学

目次

1. 地域貢献部門長挨拶
2. 電気通信大学地域貢献部門
 - 2.1 組織
 - 2.2 メンバー
 - 2.3 コンセプト
 - 2.4 会合記録
 - 2.5 各事業の紹介
 - 2.5.1 地域協働システム研究事業
 - 2.5.2 ボランティア活動支援事業
 - 2.6 初年度の活動について
3. 地域貢献シンポジオン 2005
 - 3.1 コンセプト
 - 3.2 参加企業
 - 3.3 プログラム
 - 3.4 概要
 - 3.5 地域貢献事例、研究発表資料
 - 3.6 展望と今後の展開
4. SPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）支援事業
 - 4.1 事業紹介
 - 4.2 埼玉県立川越高等学校
 - 4.2.1 実施までの経緯
 - 4.2.2 実施内容 7/30
 - 4.2.3 実施内容 8/12
 - 4.2.4 添付資料
5. SSH（スーパーサイエンス・ハイスクール）支援事業
 - 5.1 事業紹介
 - 5.2 芝浦工業大学柏中学高等学校
6. 中学生職場体験受入事業
 - 6.1 府中市立浅間中学校

7. ボランティア活動支援事業

7.1 ボランティア活動支援システム構築の概要

7.2 ボランティア活動登録システム

7.3 ボランティア依頼システム

7.4 ボランティア活動報告

7.5 ボランティア活動報告システム・データベース構築に向けて

8. 発明クラブ

8.1 概略

8.2 組織

8.2.1 設立の経緯

8.2.2 組織

8.2.3 会員構成

8.3 クラブ活動

8.3.1 活動形態

8.3.2 活動記録

8.4 広報活動とメディア

8.4.1 広報

8.4.2 マスメディア取材等

9. 美化ボランティア事業

9.1 会合記録

9.2 メンバー

9.3 活動記録

10. その他事業

10.1 花植え事業

10.1.1 事業開始の経緯

10.1.2 事業内容

10.2 三鷹ネットワーク大学

1. ご挨拶

我々の社会はかつて経験したことのないスピードと深度において、変容のプロセスにあるものと思われます。そんな時代にこそ、大学は揺るぎない知のコモンズとして、社会を構成するすべての人びとに、叡智を提供し続けなければなりません。

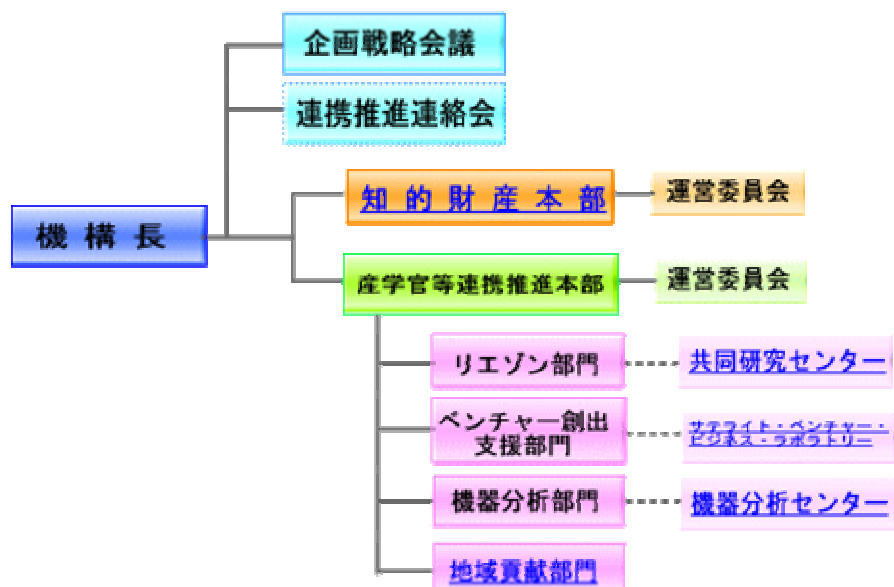
地域貢献部門は、大学の本来的な役割を再確認するべく国立大学法人化を機に設立され、今年で 2 年目を迎えました。私たちの使命は単なるボランティア活動の組織化にとどまらず、コミュニティや非市場的活動領域における協働の開発・実践にあると考えています。

全くゼロからの出発であったので、活動基盤の形成から取りかかりました。幸いにも学内の多くの方々のご理解・ご協力を得て、予想を上回る成果をあげることが出来ました。特に、使命の重要性を認識し、多忙な本務を抱えながらも積極的に部門活動を担ってくれた部門メンバーや、背後で支援活動を展開してくれた事務局(研究協力課)、学生課、広報室等、学内関連部署関係者に深く感謝申し上げます。

新年度からは部門活動も第 2 フェーズにはいり、第 1 フェーズで形成された基盤上に電気通信大学ならではのユニークな地域貢献活動を構想し展開することになります。財源や人的資源において必ずしも十分な状況とはいえませんが、最善を尽くして取り組む所存です。

2. 電気通信大学地域貢献部門

2.1 組織



2.2 メンバー

・委員長

福田 豊 人間コミュニケーション学科 教授

・委員（あ順）

阿部 浩二 量子・物質工学科 助教授

樽林 秀一郎 附属図書館 事務長

鈴木 雅久 国際交流推進センター 助教授

田口 幹 共同研究センター 助教授

田中 健次 情報システム学研究科 教授

永野 寛 共同研究センター 客員助教授

林 茂雄 量子・物質工学科 教授

宮寄 武 知能機械工学科 教授

研究協力課

2.3 コンセプト

大学の社会貢献といっても様々な形態と様式がある。研究者それぞれの研究対象や方法によるからであり、いかなる研究活動も直接間接に社会に役立つものであるからである。しかし、他方で、研究活動の結果としての業績ないし「知」が、人々の真の平和と幸福を発展せしめるものなのかどうかは、研究者個人の見解や信念のみで必ずしも十分に把握できるものではない。それが多くの人々の圧迫のために利用される危険性や、一部の団体・組織の利権を強化したりする危険性を除去するためには、特定の組織・団体から来るいわばバイアスを除去する必要があるものと思われる。

私たちの活動は真空的な状況の中でなされてはいない。必ず何らかの関係性の中にあります。社会集団や組織の特性に影響を受けてなされるものなのである。知的活動も例外ではありえない。これらの影響をある程度うち消すことができるのが、生活という場から来るロジックであり、地域という基盤であると考えられる。それは、比喩的に言えば、「知」のたたずまいを正すパワーを有しているといえるだろう。地域という基盤のうえでは、私たちは等しく住民であり、生活者なのである。バイアスをうち消すことのできるそのロジックが私たちの「知」のたたずまいを正し、方向付けるものとなるであろう。地域との協働の意義がそこにあると私たちは考える。

電気通信大学の目指す地域貢献は、地元地域はもちろんのこと、ユニバーサルなコミュニティを対象として行われる。いわば都市型地域貢献ともいえましょう。やや具体的にいえば、地域やコミュニティの活性化を目的として、本学の有する知的資源を地方公共団体やNPO、教育機関等に還元するとともに、地域やコミュニティとの連携・交流を通じて大学の教育研究の活性化及び深化を図るための支援を行うということになる。そして、そのためには、単なるボランティア活動の組織化にとどまらず、コミュニティや非市場的活動領域における協働やコミュニティ資源の開発・実践を促進することに取り組むことが重要であると考えます。

2.4 会合記録

- ・第1回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 4 月 25 日（月）

議 題 1 新年度の活動について
2 参加登録システムについて

- ・第2回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 5 月 23 日（月）

議 題 1 美化ボランティアについて
2 ボランティア活動支援体制について

- ・第3回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 6 月 20 日（月）

議 題 1 美化ボランティアについて
2 ボランティア活動支援体制について

- ・第4回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 7 月 25 日（月）

議 題 1 美化ボランティアイベントについて
2 ボランティア活動支援体制について

- ・第5回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 10 月 3 日（月）

議 題 1 ボランティア活動報告システムについて
2 芝浦工業大学柏中学高等学校 SPP プログラムへの協力

- ・第6回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 11 月 24 日（月）

議 題 1 地域貢献シンポジオン 2005

- ・第7回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 12 月 12 日（月）

議 題 1 平成 17 年度事業報告
2 平成 18 年度事業計画案

2.5 各事業の紹介

地域貢献部門は、大きく分けて 2 つの事業領域を持つ。一つは、学生や職員のボランティア活動支援事業領域であり、もう一つは、地域協働システム研究事業領域である。

2.5.1 地域協働システム研究事業

地域協働システム研究事業においては、コミュニティや非市場的活動領域における協働の開発・実践を支援・推進する。また、電気通信大学ならではの地域貢献活動の構想と推進を担当する。

今年度は、非市場的活動領域における協働構築に関して、CSR(企業の社会的責任)をベースに、新たな社会システムの方法性を探る地域貢献シンポジオン 2005、電通大ならではの地域貢献活動として、高校の理科教育を支援する SPP(サイエンス・パートナーシップ・プログラム)支援事業、中学生職場体験実習協力事業、子どもたちに科学の楽しさを伝える発明クラブなどの事業を実施した。

2.5.2 ボランティア活動支援事業

主旨：大学の地域貢献活動の一環として、学生の各種ボランティア活動への参加を求める依頼が増加している。特に、初中等教育機関での教育補助ボランティアへの要請が多い。従来、このような依頼は学生課を通じる場合と教員・職員への個人的なつながりによる場合があった。前者では学生掲示板にボランティア募集の掲示を行い、全学生へ周知したが、不特定多数への呼びかけのみでは学生の関心を集めることができなかった。後者の場合には、パイプ役となった教職員周囲の学生に周知・斡旋することで、迅速かつ効率的にボランティア活動へ対応できる。しかし個人的なレベルでの斡旋は教職員に重い負担をかけるとともに、量的な限界があった。より広範な依頼をより多くの学生へ効率的に周知するために、ボランティア活動支援システムを構築し、平成 17 年度は以下の 3 項目を中心に支援事業を展開した。

① ボランティア活動への学生登録システムの構築

ボランティア活動への意識の高い学生を抽出して登録させることで、応募確率の高い母集団を準備する。作業の効率化のために具体的な学生登録は Web 上で行うシステムを構築し、4月から運用を開始した。平成18年1月時点での登録学生は約50名である。

② ボランティア活動依頼システムの構築

より広範なボランティア活動依頼を受け付けるために、Web 上で依頼を受け付けるシステムを構築した。システムの試行段階では教育機関や公共機関からの依頼のみを受け付けることとした。電子メールを用いて1で登録された学生に依頼内容を迅速に周知し、その後の具体的な交渉は依頼者と学生に委ねている。平成18年1月時点までのボランティア依頼は十数件である。

③ ボランティア活動報告

本支援システムの有効性を検証するために、ボランティア活動を行った学生に活動報告書を提出させる。平成18年1月時点では書面もしくはPDFファイルでの提出を求めているが、将来的には Web 上で活動報告ができるようなシステムを構築する予定である。報告書の事例を分析することで、ボランティア支援システムの改善点を探るデータとする。平成18年1月時点で判明している検討課題は、依頼者側の「短い時間スケール（1週間程度）」と「学生側の時間スケール（1月程度）」がずれているため、必ずしも依頼者の要望に応えられない事例が見受けられることである。両者のマッチングを改善するための工夫が必要である。

2.6 設立初年度（平成 16 年度）の活動について

本部門は昨年度（平成 16 年度）に設立されたばかりである。

その初年度における部門活動の記録をここに掲載する。

・ 第 1 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 5 月 17 日（月）

- 議 題
- 1 地域貢献部門の運営方針について
 - 2 「現代教育的ニーズ取組支援プログラム」への応募について
 - 3 共催の承認について
 - 4 平成 16 年度予算案について

・ 第 2 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 6 月 7 日（月）

- 議 題
- 1 予算案への追加事項
 - 2 国際交流推進センターからの検討事項について
 - 3 「地域貢献」の定義について
 - 4 当部門の機能について

・ 第 3 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 6 月 28 日（月）

- 議 題
- 1 第 1 回産学官連携推進本部運営委員会について
 - 2 共催事業・情報通信月間行事シンポジウムについて
 - 3 附属図書館の地域開放について
 - 4 三鷹ネットワーク大学について

・ 第 4 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 7 月 26 日（月）

- 議 題
- 1 「大学としての窓口」について
 - 2 「大学の総合案内と図書館」について

・ 第 5 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 8 月 23 日（月）

- 議 題
- 1 事業計画予算案について

2 「大学の総合案内と図書館」について

3 今後の活動について

・ 第 6 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 9 月 27 日（月）

議 題 1 地域へのメーリングリストサービスの提供について

・ 第 7 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 10 月 25 日（月）

議 題 1 地域へのメーリングリストサービスの提供について

2 Web ページの構成について

・ 第 8 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 11 月 29 日（月）

議 題 1 事務室設置について

2 Web ページの構成について

・ 第 9 回地域貢献部門会議

日 時 平成 16 年 12 月 20 日（月）

議 題 1 コンプライアンス

2 コンセプト案

3 Web ページの構成について

・ 第 10 回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 1 月 24 日（月）

議 題 1 Web ページの構成について

・ 第 11 回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 2 月 21 日（月）

議 題 1 ボランティア活動登録フォームについて

・ 第 12 回地域貢献部門会議

日 時 平成 17 年 3 月 28 日（月）

議 題 1 平成 17 年度事業報告

2 平成 18 年度事業計画案

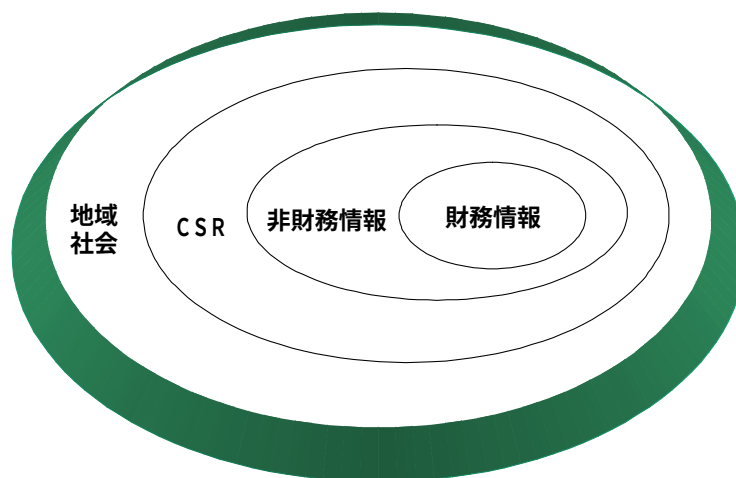
3. 地域貢献シンポジオン 2005

3.1 コンセプト

シンポジオンとは「饗宴」という意味である。まだ確立していない「地域貢献」という考え方やコンセプトを巡って、大いに語り合おうという意味が込められている。

今回のテーマは「地域社会の中の新たな産学連携ーコミュニティとCSRー」であった。その趣旨ないしねらいを示してみよう。従来、産学連携は企業の経済活動領域（市場領域）において推進されてきた。しかし、最近、企業、大学の双方に社会と新たな関係性形成の機運が生まれてくるに及んで、非市場領域における産学連携の可能性ないし必要性が生じてきている。

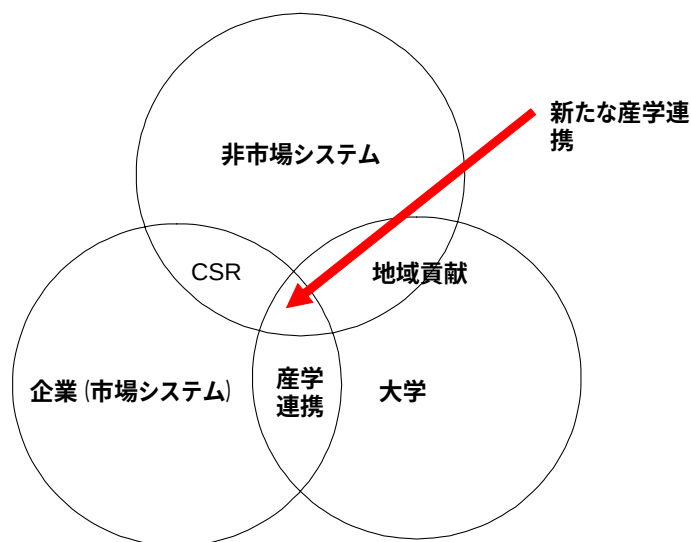
すなわち、企業の側ではCSR（Corporate Social Responsibility/企業の社会的責任）活動を企業の重要な活動として認識するようになってきたのである。CSRの認識は新しいものではなく、40年近い歴史を持つといわれているが、今回は、企業中心社会の変容や自然環境的制約の顕在化など、自然・社会システムの一部としての企業という観点からの検討や考察を背景としており、来るべき近未来社会の新たな社会システムにおける企業の役割をデザインすることにつながるものである。



SRIを支える基盤

他方では、大学の社会的役割はますますその重要性を増してきている。脱工業社会、情報化社会の到来により、理論的知識が社会的な重要資源となってきたからである。また、国立大学の法人化により、大学が開発し蓄積してきた知識を、社会やコミュニティに還元することがさらに求められるようになってきているからである。

ここに、新たな産学連携のフィールドが現れつつあるのである。我々は、新たな社会システムにおける企業や大学の機能や役割を、多摩地域で事業を展開する有力企業や大手企業と協働することにより、デザインしていくことを目指す。



新たな産学連携のドメイン

3.2 参加企業（50 音順）

① アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

アフラック・キッズサポートシステムを柱とした社会貢献活動を展開。さまざまな病気と闘う子供たちを励ます活動のアフラックペアレンツハウスの他、アフラックがん遺児奨学基金、チャリティコンサート、フォーラム開催などがある。また社内ボランティア活動として、ワンハンドレッドクラブ、バレンタイン献血、パンボラ、花ボラ、義援金支援などの活動を推進している。電通大チャリティコンサートを共催。2005 年 9 月朝日市民企業賞を受賞（朝日新聞社主催）

② F C 東京（東京フットボールクラブ株式会社）

Jリーグ百年構想の下、サッカークリニック・サッカースクール・各種イベントを中心に、学校や各地域におけるサッカー活動との連携・協力を図り、青少年をはじめ都民各層に対するサッカーの指導・普及活動に努めている。地域貢献シンポジオン第Ⅱ部では、キックターゲットを提供し、HPでの広報活動に協力。

② (株)西友

2001年よりサステナビリティレポートを公開、2005年は環境問題のみならず、小売業に関連の深い「商品」、「アソシエイト（従業員）」、「コミュニティ」を加え、従来の環境方針をCSR方針として打ち出している。調布店、仙川店、国領店ではシンポジオン2005の広報活動としてポスター掲示、チラシなどの広報活動に協力。

③ サントリー(株)

都内唯一のビール工場、サントリー武蔵野工場では、資源の有効活用、CSR への取り組みとして 25%の節水技術を試験導入している（日経新聞 8 月 30 日掲載）。また環境協定を結ぶ府中市において、市内全体清掃・多摩川の清掃にはボランティアで社員約 200 名が参加した。

3.3 プログラム

電気通信大学 地域貢献シンポジオン2005

11月19日 土
・
26日 土

地域社会の中の新たな産学連携 ―コミュニティとCSR―

第1日

Ⅰ部 美化ボランティアイベント（会場：講堂前）
Ⅱ部 地域貢献・社会貢献に関する事例・研究発表

日 時	11月19日（土）10:00～15:30
会 場	Ⅰ部 電気通信大学講堂前 Ⅱ部 電気通信大学創立80周年記念会館
参 加 費	無料
主 催	電気通信大学 地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門
参加企業 （50音順）	アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社） 株式会社 西友 SUNTORY 株式会社 東京フットボールクラブ 株式会社

第2日

申込み方法は裏面をご覧ください

Ⅲ部 電通大チャリティコンサート
「みんなで何かを始めよう―未来を担う子どもたちへ―」
〔出演：COCORO*CO〕

日 時	11月26日（土）14:30～16:00
会 場	電気通信大学講堂
定 員	抽選で500組1000名様を無料ご招待
主 催	電気通信大学 地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門
共 催	アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

※ このコンサートは小児がんなどの難病と闘う子どもたちとその家族を支えるチャリティコンサートです。
※ 当日はチャリティを募らせていただき、いただいた浄財を「(財)がんの子供を守る会」に寄付させていただきます。

開催主旨

産学連携のフィールドは非市場の領域にも広がってきており、新たな協働の仕組み作りに着手する時期に来ている。電気通信大学地域産学官連携推進機構地域貢献部門は、このような社会的文脈に沿う試みとして、「地域社会の中の新たな産学連携」を開催し、社会貢献活動に関する先進的取組事例を我々地域の中の大学や企業一の実験基盤として共有することを目指す。

同時開催：電気通信大学フォーラム2005

- ・ 大学紹介：11月18日（金）・19日（土）〔研究室公開、大学講演会〕
- ・ オープンキャンパス：11月19日（土）〔模擬授業、入試説明会〕
- ・ 保護者のための就職ガイダンス：11月19日（土）・20日（日）
- ・ 企業研究展示会：11月18日（金）・19日（土）

東京都調布市調布ヶ丘1-5-1
<http://www.uec.ac.jp/>

申込み方法・プログラムは裏面をご覧ください

電気通信大学地域貢献シンポジオン2005

地域社会の中の新たな産学連携 ―コミュニティとCSR―

※ CSRとは「企業の社会的責任」という意味です。

I部 II部 11月19日 土

- | | |
|-------------|--|
| 10:00~11:30 | I部 美化ボランティアイベント(会場:講堂前)
空き缶、ペットボトルでゲームを行います。
注)空き缶、ペットボトルはラベルを剥がし、洗って乾かしてお持ちください。 |
| 13:00~15:30 | II部 地域貢献・社会貢献に関する事例・研究発表(会場:創立80周年記念館) |
| 13:00~13:20 | 研究発表1「“場”を創るJクラブのネットワークポテンシャル」
東京フットボールクラブ株式会社(FC東京)コミュニティアフェアーズマネージャー 久保田淳 |
| 13:20~13:50 | 研究発表2「流通とコミュニティ」
株式会社 西友 企業コミュニケーション部社会環境グループマネージャー 嵩一成 |
| 13:50~14:40 | 研究発表3「水と生きる SUNTORY・社会と自然との共生をめざして」
SUNTORY株式会社 武蔵野ビール工場技師長 早乙女明良 |
| 14:40~15:30 | 研究発表4「小児がんや難病治療中の子どもと家族を財団法人・NPOと連携して支援」
※この活動は朝日新聞社主催の朝日企業市民賞を受賞されています。
アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)広報部課長 永淵裕敏 |

電通大チャリティコンサート

みんなで何かを始めよう―未来を担う子供たちへ―

III部 11月26日 日 14:30~16:00 会場:講堂

※ 抽選で500組1000名様を無料ご招待

申込方法 II部、III部ともに以下のいずれかでお申込ください。

(1) WEB参加登録 URL: <http://www.uec.ac.jp/>

(2) FAX 0424-43-5518 までこちらの用紙でお申込ください。

※ III部につきましては、ペア(2名様)券となっております。

※ お申し込みが定員を超える場合は抽選とさせていただきます。

なお、共催のアフラックからお送りする招待状をもって当選の発表に代えさせていただきます。

出演: COCORO*CO

年齢層を問わないバウフルなゴスペル
ユニットCOCORO*CO。
大きな古時計、花、アメージンググレイ
ス、クリスマスソング他。

問合せ先 e-mail: desk@dcc.uec.ac.jp FAX: 0424-43-5518

参加申し込み用紙 (FAXでお送りください)

登録いただいた各種データは当該イベント招待状発送のため、共催のアフラックに預託・提供いたしますが、アフラックは当該イベントのご招待状を発送するのみに使用いたします。

氏 名

郵便番号・住所

電話番号

e-mail

所 属

☐ II部(研究発表)参加希望 ☐ III部(チャリティコンサート)参加希望 (□の中に○をつけてください)

3.4 概要

組織だった地域・社会貢献を参加者と共有することが出来たことは有意義であった。その概要を下記に記す。

① 第Ⅰ部美化ボランティア活動 学内参加者約 50 名

ボランティア活動の一步として、ボランティア活動登録の学生有志を中心として学外清掃をいった。当日は教職員と学生により学外周辺 6 箇所を清掃した。継続的に行うとともに、地域企業との連携を視野に入れた活動を試みることとしている。

② 第Ⅱ部空き缶・ペットボトル回収機・ラッキーチケット総数 702 枚

第Ⅱ部事例・研究発表の 4 社（アフラック、F C 東京、西友、サントリー）と電気通信大学生生活共同組合等の協力により、ラッキーチケット付空き缶・ペットボトル回収機を設置。環境・美化問題への配慮とボランティア精神の啓発活動を兼ねた分別回収を行った。

③ 第Ⅱ部事例・研究発表 参加者 80 名

近隣企業 4 社（アフラック、F C 東京、西友、サントリー）による CSR の取り組みを紹介した。

参加者は行政、市民、企業、研究者などさまざまであり、CSR への関心の高さを示していた。

また大学を通じた異業種間での交流は新たな産学連携への協働・連携の可能性を秘めている。

④ 第Ⅲ部チャリティコンサート 参加者 280 名

アフラックとの共催により、女性ゴスペルグループ COCORO*CO による電通大チャリティコンサートを開催した。近隣の福祉施設を招待、車椅子での参加者 8 台を学生ボランティアがサポートし、学内、学外を含め 280 名が参加した。当日の浄財 10 万円は財団法人がんの子供を守る会へ寄付した。

3.5 地域貢献事例、研究発表テーマ・要旨・プロフィール

① 事例・研究発表 1

テーマ 「場を創るネットワークポテンシャル—FC 東京を事例として—」

発表者 久保田 淳（東京フットボールクラブ（株）コミュニティアフェアーズマネージャー）

要 旨 サッカーにおけるホームタウン性は公共圏における非日常的空間の共有にあたり、市場と非市場の架け橋となる可能性を提起する。

② 事例・研究発表 2

テーマ 「流通とコミュニティ—西友の社会貢献活動について—」

発表者 **嵩 一成**

（（株）西友企業コミュニケーション部地域環境グループマネージャー）

小畑 絵美（（株）西友企業コミュニケーション部地域環境グループ）

要 旨 流通業として西友が考えるCSRの目的とテーマの説明と商品・地域コミュニティへの貢献・従業員に対する社会環境教育など具体的な取り組みの紹介。

③ 事例・研究発表 3

テーマ 「水と生きる—社会と自然との共生をめざして—」

発表者 早乙女 明良（サントリー（株）武蔵野ビール工場技師長）

要 旨 環境問題に配慮した水資源の有効活用策、独自技術による節水に関しての取り組み等を紹介。

④ 事例・研究発表 4

テーマ 「小児がんや難病治療中の子どもと家族を財団法人・NPO と連携して支援」

発表者 永渕 裕敏（アフラック 広報部課長）

要 旨 小児がんなどの難病の子どもを持つ親が治療のために遠隔地から都心の病院に通う場合、治療費に加えて、交通費や滞在費の負担が重く家族にのしかかる。こうした窮状を救おうと、安価に利用できる宿泊・支援施設「アフラックペアレンツハウス」を設立し、支援している活動の紹介。

3.6 展望と今後の展開

今年度の活動は、いわば新たな連携という船出の一点鐘であった。幸いに多摩地域で事業を展開する大手企業の4社に参加していただくことが出来たので、次年度以降には、さらに連携を広げるべく先進的な取り組みを計る企業を巻き込んだ地域貢献シンポジオンを開催する。それとともに、コミュニティや学びのプロセスを共通基盤としたCSRの展開について、連携企業と研究会やシンポジウムを開催することを計画している。

この新たな取り組みにおいて、企業はCSRを新手のマーケティング手段として利用するのではなく、新たな社会システムを担う主体として自己組織化を目指して進化を続けていくことになるだろう。大学は、このような企業システムの進化を評価したり、理論的にサポートすることを通じて、自らは「知のコモンズ」として、市場と非市場を架橋する役割を認識していく役割を新たに引き受けることになると思われる。

4. SPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）支援事業

4.1 事業紹介

文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課からの文書「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業に関する調査研究に係る研究者招へい講座、教育連携講座、教員研修の二次募集について（照会）」（平成 16 年 5 月 11 日付）から要点をまとめてみた。

「科学技術・理科大好きプラン」（平成 14 年度より）の一環として実施されるプログラムである。中・高と大学等が連携し、大学等の人材・施設・設備等を活用しながら、生徒達に先進的な科学技術・理科、数学教育等を実施することを目的としている。

SPP の実施形態は次のように分類される。

- ・研究者招聘講座 大学等から中・高に出向いて実施する
- ・教育連携講座 大学等で観察・実験・実習を実施する
- ・教員研修 大学等で教員を対象にして実施する

これだけでは分かりにくいのが、申請にあたっての注意点を讀むと、SPP のめざす方向性が浮かび上がってくる。

- ・体験的・問題解決的学習であること
- ・単なる見学・訪問、単なる技術習得の場であってはいけない
- ・イベント的な企画ではだめ
- ・大学説明会をもくろむような下心があってはいけない

（参考：文部科学省HP）

様々な最先端の研究成果や研究施設・実験装置等を有する大学、公的研究機関、民間企業、科学系博物館、学会等と、中学校や高等学校等の学校現場との連携により、児童生徒の科学技術・理科、数学に関する興味・関心と知的探究心等を一層高める機会を充実することを目指す調査研究です。

大きく次の2つの枠組みにより実施されています。（1）連携プログラム

研究者を教育現場に招へいして実施される実験等の講座、大学、研究機関等の施設、機材を活用して実施される講座及び教育委員会と大学、研究機関等の連携により実施される教員研修（平成17年度全国で約700件）に対する支援等を行うことにより、中学校・高等学校等と大学、研究機関等の連携を推進しつつ、その適切なあり方について調査研究を実施しています。

（2）教育プログラム・教材開発

海外における大学、研究機関等と教育現場との連携の実態や研究者の業績について社会へ発信するための手法等についての調査研究を実施します。

4.2 埼玉県立川越高等学校

さて、川越高校の SPP はどのような内容であったか。実施報告書（平成 17 年 11 月 23 日）の中の「目的・テーマ」を要約すると次のようになる。

目 的 最先端の物理の研究分野に携わる研究者から講義・実験指導を受け、研究施設を訪れ、実験の観測データの処理や解釈等に関わることにより、物理学がどういう学問なのか、研究とはどういうことかを体感させ、生徒の進路選択に資するとともに、自分の能力を伸ばす分野を見つけるきっかけにすることを目的とする。

テーマ 「物理学最前線」－ 物性物理学と物理工学 －
内 容

（１）準備講座

連携機関：埼玉県立川越高等学校、日本科学未来館

（２）招聘講座

①川越高校での招聘講座

連携機関：早稲田大学、理化学研究所

電気通信大学（情報工学科 今村俊幸講師）

②研究施設での招聘講座

連携機関：早稲田大学、東京大学、日本科学未来館・ソニー、
理化学研究所、電気通信大学

4.2.1 実施報告

4.2.1.1 実施までの経緯

- 1) 5-13-2005 川越高校より SPP 第二次募集に当たって協力依頼。
- 2) 5-18-2005 川越高校に協力する旨回答。
- 3) 7-7-2005 川越高校より SPP 第二次募集に採択された旨連絡。
電通大との連携については下記 2 件となった。

- ・ 7/30(土) 電通大 (J 科) 今村俊幸講師による川越高校での講座
- ・ 8/12(金) 電通大 (F 科) 林茂雄教授による電通大での講座

4) 7-19-2005

〔林〕 林から川越高校担当者に電子メールにて素案提示。

以後、数回にわたってメール交換。既に行なわれた量子力学の話にも触れてほしいとのこと。

5) 7-27-2005

〔今村〕 講義に加えて簡単な現地実験を行うための環境を川越高校担当者と相談。ノート PC を使った並列レイレーシングの実験を行う ことになった。

6) 7-30-2005

川越高校での研究者招聘講座実施 (J 科、今村俊幸講師)。

7) 8-12-2005

教育連携講座を電通大にて実施 (F 科、林 茂雄教授)。

4.2.2 実施内容〔今村俊幸〕 7-30-2005 (土)

9:30-11:30

講義「物理シミュレーションと可視化及び並列コンピュータ」
コンピュータの歴史，コンピュータの仕組み，プログラミング言語
計算機シミュレーション，シミュレーションの高速化/並列処理について講義を行った。

11:40-12:30

レイトレーシングの並列処理実験。

川越高校所有のノート PC5 台(1 マスタ,4 スレーブの構成)を 100B ハブに接続し，ParallelKnoppix を利用して並列計算環境を構築。

今村が情報工学実験第 2 で使用するレイトレーシングプログラムを動作させ、1 台、2 台、4 台とスレーブ PC を増やした際の効果を検証。

12:40-13:30 SPP 統括の三菱総合研究所松本氏と意見交換。

13:30 帰路

4.2.3 実施内容 [林 茂雄] 8-12-2005 (金)

9:30 バスで 川越高校一行来学。

引率教員 2 名、生徒 1 2 名 (主に物理部)。

10:00～11:10 東 6-237 教室にて講義

自作 Power point ファイル「ナノテクノロジーとロボティックス」を使用。以後、TA1 名。



11:15～12:00 東 6-237 教室にて講義

自作の pdf ファイル「エレクトロニクス：素子からシステムまで」を使用。

13:00～15:30 東 6-214 実験室にて実習。

上記 pdf ファイルを利用。

CdS センサーの光特性、LED の電圧電流

特性、トランジスタの静特性、論理 IC の動作の 4 テーマまで実習できた。

15:40 帰路。

4.2.4 添付資料

講義用資料 「物理シミュレーションと可視化及び並列コンピュータ」

講義用資

「ナノテクノロジーとロボティックス」

講義・実習用資料「エレクトロニクス：素子からシステムまで」

特別講義：物理シミュレーションと可視化及び並列コンピュータ

電気通信大学情報工学科
今村俊幸
imamura@im.uec.ac.jp

講義の目的

- コンピュータの歴史および仕組みについての講義とプログラミング言語の歴史とその使い方
- コンピュータによる物理シミュレーションの方法の講義とシミュレーションプログラムの演示および生徒の実習。
- 生徒による簡単なシミュレーションプログラムの作成と並列化による高速化の可能性の検討および討議。

30/07/2005

川越高校SPP

2

I. コンピュータの歴史

前史から創世記、現在まで

コンピュータの歴史

コンピュータとは

「コンピュータ」=「計算機」（電卓ではない）

＊学術的には電子素子を利用し処理する計算機
(真空管→トランジスタ→IC→LSI→VLSI→・・・)

- computer →
n 電子計算機, コンピューター (=electronic ~); 計算器, 計算者.
 - calculator →
n 計算者, 計算機; 計算表; 打算的な人.
- 研究社「リダーズ英和辞典」より

30/07/2005

川越高校SPP

4

コンピュータ以前

- ソロバン、算盤 (中国, 日本)
- パスカルの歯車式手回し計算機
- ライブニッツ: 桁ずらし
「天文学者たちを複雑な計算の間の忍耐から救う」
計算は、人間の手を煩わすに値しない作業
- バベジ: 「解析機関」自動式計算機
プログラムを読み取って歯車として実現せず。



30 出典: <http://www.maxmon.com/history.htm>, <http://ei.ics.ut.edu/history/>

コンピュータ (創世期)

- 第一世代: 真空管
 - ENIAC(1946, 一般に最初のコンピュータといわれている)



↑ 真空管が故障すると交換が必要。
← プログラムは配線を結合して作成。

30/07/2005

川越高校SPP

6

コンピュータ (創世期)

- 第一世代: 真空管
 - EDSAC(1949, 世界初のノイマン型計算機といわれている)



↑ 水銀に超音波を流しメモリとして利用。
← プログラムはメモリ上に内蔵

30/07/2005

川越高校SPP

7

コンピュータ (創世期から現在)



出典: NECホームページ
<http://www.nec.com>

現在最高性能のスパコン

- <http://www.top500.org/>



出典: myCOM PC-WEB, Lawrence Livermore National Laboratory
30/07/2005 NASA NAS division などより

9

こんな所にもコンピュータ

- 携帯電話
- ゲーム機
- 車・家電機器...



30/07/2005

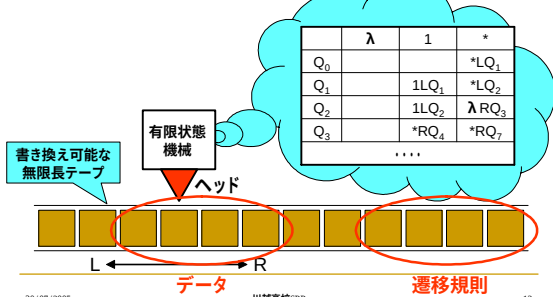
10

II. コンピュータの仕組み

>>

チューリング機械

- 計算機の動作概念を理解するためのモデル



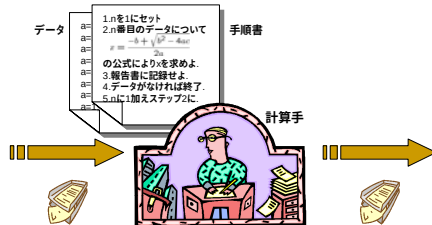
30/07/2005

川越高校SPP

12

実際の計算システムは？

- 手順を決めた計算手順書に従って左から右に。
□ その昔は計算手という職業があった。



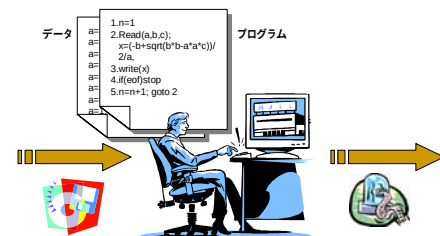
30/07/2005

川越高校SPP

13

実際のコンピュータでは？

- プログラムという形で記述されたアルゴリズムに従って処理する。



30/07/2005

川越高校SPP

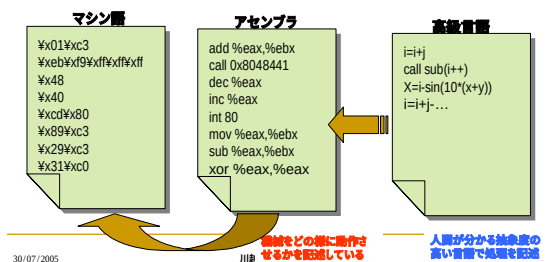
14

III. プログラミング言語

>>

プログラミング言語

- 人間が理解できる言語とコンピュータが理解できる言語は異なる。マシン語 (電子コードの羅列)



30/07/2005

川越高校SPP

プログラミング言語

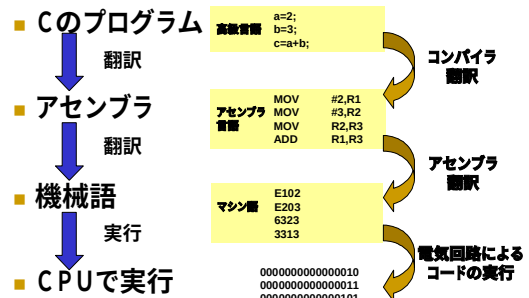
- 処理の概念をより抽象的・正確に記述する
 - FORTRAN
 - 数式を数学的に的確に記述
 - COBOL, BASIC, PASCAL, ...
 - コンピュータの初期に登場
 - C言語/C++/C#
 - システム構築で当然の存在
 - JAVA
 - VMによりシステムの垣根を取り払った
 - Python, Ruby, etc...

30/07/2005

川越高校3PP

17

コンパイルと実行



30/07/2005

川越高校3PP

18

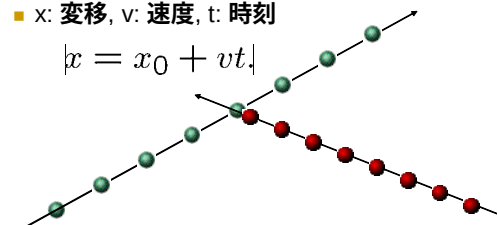
IV. 計算機シミュレーション

>>

等速度運動

- x: 変移, v: 速度, t: 時刻

$$x = x_0 + vt$$



- ・ 単一剛体の場合はtを変化させるだけ、グラフを書くのと同じ。
- ・ 複数の場合は、衝突など複雑な計算が必要。

30/07/2005

川越高校3PP

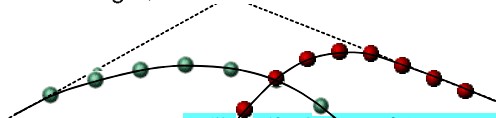
20

等加速度運動

- x: 変移, v: 速度, a: 加速度, t: 時刻

$$x = x_0 + v_0 t + \frac{1}{2} a t^2$$

$$v = v_0 + at$$



- ・ 単一剛体の場合はtを変化させるだけ、グラフを書くのと同じ。
- ・ 複数の場合は、衝突など複雑な計算が必要。

30/07/2005

川越高校3PP

21

沢山かつ複雑になれば？

- 衝突 (壁との鉛直方向)

$$\begin{aligned} x'_{\perp} &= -x \\ x'_{\parallel} &= x \end{aligned}$$

- 壁
- アルゴリズム
1. $t=10000$ (大きな数)とする
 2. $j=1$ とする
 3. $|x_j(t) - x_{\text{wall}}| = r$ となるtを探す。
 4. 壁の法線方向とボールの進行方向の内積をとって正(向きが同じ)なら6.へ。
 5. $t < t_j$ ならば $t=t_j$ とする。
 6. $j=j+1$; もし全ボール数に達してなければ3.へ
 7. ボール同士の衝突についても2.から6.同様にして衝突を調べる。
 7. 現在からt秒後に衝突するので衝突の式に適用
 8. 次の衝突を計算する場合は1.へ

- ・ 壁との衝突は容えていたり複数に
- ・ ボール同士の衝突計算が必要。
- ・ プログラムで書く

30/07/2005

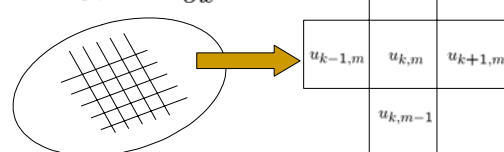
さらに複雑なシミュレーションは？

- 現象を支配する方程式を利用

- 熱の伝導現象

$$\frac{\partial u}{\partial t} = \kappa \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

微分を
 $u' = (u(x+\Delta) - u(x))/\Delta$
 で近似する(Δ は小).



$$u_{k,m} = \frac{1}{4}(u_{k-1,m} + u_{k+1,m} + u_{k,m-1} + u_{k,m+1})$$

→ 巨大な連立一次方程式を解くことになる。

30/07/2005

V. シミュレーションの高速化・並列処理について

>>

1.LAMのブート
使用するマシンのホスト名をファイルに記述しておく。

ブート可能かチェック
\$recon -v ホストファイル名

LAMのブート
\$lamboot -v ホストファイル名

2.コンパイル
hcc(c), hcp(c++), hf77(fortran)でコンパイル。

3.プログラムの実行
すべてのノードで実行する場合
\$mpirun N プログラム名

プロセス数を指定する場合
\$mpirun -c プロセス数 プログラム名

4.LAMの終了
プロセスやメッセージの削除
\$lamclean -v

LAMデモンの終了
\$wipe -v ホストファイル名

CGプログラムの実行方法

./rt1 CGファイル
./rt2 -d -p CGファイル

30/07/2005

川越高校SPP

33

さらに余力があれば

- 次のキーワードについて調査してみよう。

共有メモリ・分散メモリ方式
MPI (Message Passing Interface)
仕事の分割・割り当て
静的・動的手法

- 階層型マスター・ワーカ方式
PCの台数が多いとき処理効率がよいらしい。
どのような方式だろうか？
プログラムをどう修正したらよいだろうか？

30/07/2005

川越高校SPP

34

川越高校SPPプログラム
ナノテクノロジーとロボティクス
講義と実験

電気通信大学 量子・物質工学科 林 茂雄

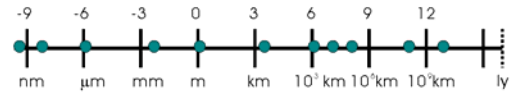
ナノとは
ナノの世界のトランジスター
エレクトロニクス実験

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

1

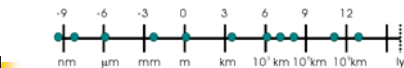
1. ナノとは

■ 対数目盛で考えてみる



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

2



このスケールは？



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

3

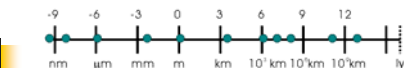


このスケールは？

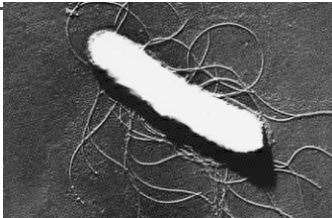


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

4



このスケールは？

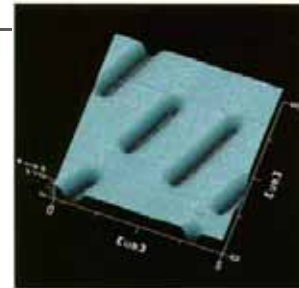


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

5



このスケールは？

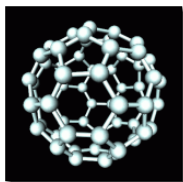


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

6



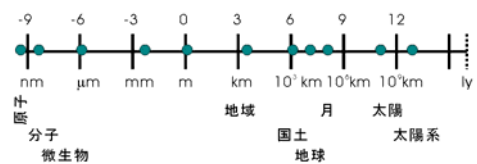
このスケールは？



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

7

対数で世界をながめると



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

8

ナノサイズは

- 孤立したナノ・・・クラスター、ナノチューブ
- バルクの中の「構造」・・・閉じ込め

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

9

2. ナノテクノロジーの歴史

- バルクとは違うナノの予想・・・久保亮五博士
- 原子や分子のクラスター・・・確かに違う
- カーボンナノチューブ発見・・・飯島澄男博士
- 集積回路技術の発展・・・集積度向上
→より小さいトランジスタ
→量子効果



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

10

2. 1. 久保効果

- バルクでは金属内自由電子はエネルギーバンドを形成
- サイズが de Broglie 波長程度になるとエネルギーが離散的になる (量子閉じ込め効果)
- それによって比熱や帯磁率が影響を受ける

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

11

物質波

- (E, p) で物質の状態を特徴づける

de Broglie 波長 λ

$$E = \hbar\omega$$

$$p = \hbar k$$

$$k = \frac{2\pi}{\lambda}$$

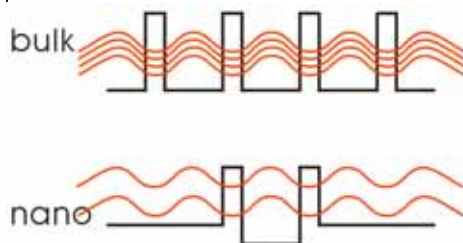
真空中の自由粒子

$$E = \frac{p^2}{2m}$$

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

12

2. 2. 簡単な一次元モデル

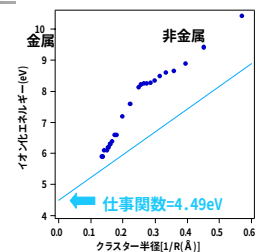


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

13

2. 3. 原子のクラスター (Hg)

- 粒子サイズがどんどん小さくなると

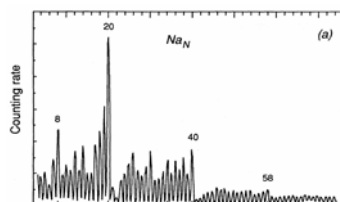


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

14

2. 3. 原子のクラスター (Na_n)

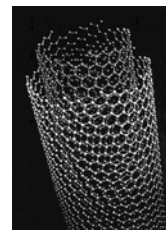
- Magic number が存在



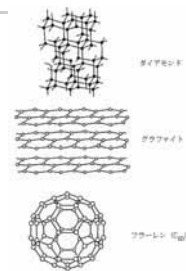
8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

15

2. 4. 炭素物質



カーボンナノチューブ



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

16

3. ナノの世界のエレクトロニクス

3.1. Moore の法則

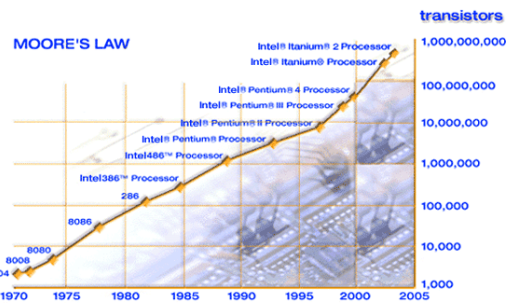
- "... (T)he first microprocessor only had 22 hundred transistors. We are looking at something a million times that complex in the next generations—a billion transistors. What that gives us in the way of flexibility to design products is phenomenal."

—Gordon E. Moore (1965)



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

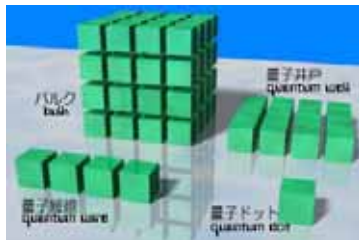
17



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

18

3.2. 量子閉じ込め

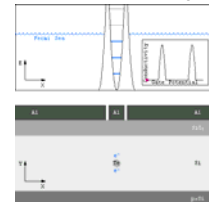


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

19

3.3. 新しいトランジスター

- 単一電子トランジスター (SET)

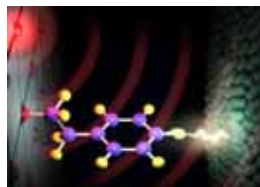


8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

20

3.3. 新しいトランジスター

- 分子トランジスター



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

21

3.4. 量子力学 (Quantum Mechanics) の関わり

- ナノサイズだからQMが必要
- Charge carrier そのものの運動がQMで
- 最初の応用デバイスが江崎玲於奈博士のトンネルダイオード



8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

22

4. 日常の世界へ...

- 賢いロボット=情報システムのひとつ

- ・いろいろなセンサーをいろいろな場所に
- ・知識 knowledge も加味した高速判断
- ・それを生かす運動機能

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

23

5. そもそもエレクトロニクスとは

- まずは「素子」の「働き」を体験

- 将来は「働き」が感じ取れなくなるかも
蒸気機関車の力強さは新幹線にない！
飛行機のスリル感はジャンボ機にない！

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

24

今日の実習

- ブレッドボード上に**実際の素子**を配置して

将来は、身の回りの製品すべてが
System On Silicon になるかも
→ブラックボックス化
→我々から遠ざかる科学と技術

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

25

テーマ

- 光センサー
- 発光ダイオード
- トランジスター
- 論理
- 2進数
- 光センサーでモーター
- 光センサーでスピーカー

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

26

半導体の基礎:pn 接合

- Carriers (hole と electron) を含む不純物半導体を接合させる
- 接合面で carriers が拡散し、食い合う
- 接合面には carrier がなくなる (絶縁層になる) →空乏層という
- 順バイアスでは空乏層が狭まり、逆バイアスでは拡がる

8-12-2005 (Fri.) SPP 川越高校

27

5 SSH（スーパーサイエンス・ハイスクール）支援事業

5.1 SSH 事業とは

将来の国際的な科学技術系人材の育成を図るため、新たなスーパーサイエンスハイスクールとして、先進的な理数教育の長期的な実施や、英語でのプレゼンテーション演習等による国際性を育成するための取組、高大接続の在り方について大学との共同研究を推進する。また、創造性、独創性を高める指導方法、教材等の開発等の取組を実施する。

（参考：文部科学省HP）

5.2 芝浦工業大学柏中学高等学校 SSH 支援事業

4.3.1 芝浦工業大学柏中学高等学校

芝浦工業大学柏中学高等学校 SSH 担当教諭 中村 圭氏より 平成 17 年 9 月 15 日 SSH（Super Science High-school）プログラムの一環に芝浦工大柏高校が参加する「シンク・クエストHP作成コンテスト」（<http://thinkquest.jp/>）に関して、生徒の意識を高めたいとの要請を受け、物理的テーマ選択と内容のコーチの支援活動を実施した。

生徒は（35 名、1 クラス）は 2, 3 人でグループをつくりあらかじめ 13 のテーマを選択していた。地域貢献部門阿部委員と量子・物質工学科 中村 仁助手が中心となって講師の人選と依頼を行った。全 13 グループのテーマを電通大の教員（4 名）と電通大学生（1 名）及び卒業生（2 名）、電通大の分野外の講師（2 名）は他機関から招集した。

10 月 29 日（土） 講師全員で芝浦工業大学柏中学高等学校を訪問し、●●校長、●●教頭、中村圭教諭と挨拶をし、2 年生の SSH クラスのサイトと顔合わせを行った。自己紹介の後、各テーマごとに、テーマの内容に関する相談を行った。この後は 11 月 5 日、11 月 19 日、1 月 7 日の 3 日間から 1 日間ほど各講師の都合に合わせて高校を訪問し、指導を行い、以後はメール等でのやり取りで指導を行った。以下にテーマと●

1. 建築 更田邦彦（更田建築事務所）

建築の理念・歴史を大まかに学び、細かい分野においては主に環境を取り上げる。使いやすさ、外面内面とそのデザイン性、地球と人に優しい空間づくりなどについて研究をする。

2. 確率 宮寄武（電気通信大学）

対象年齢は小学生から高校生まで、簡単な確率から高校の教科書レベルのものを取り扱う

3. 流動体 宮寄武（電気通信大学）

液体：流動の方程式・波動 固体：氷・雪の結晶 気体：性質について

4. ネットワーク家電 辻野康一郎（電気通信大学卒、日本エリクソン）

家電製品を携帯電話かパソコンを使って離れた場所から操作をする。

5. ローラーコースター 阿部浩二（電気通信大学）中村仁（電気通信大学）

ローラーコースターの実験を通して、今までの既習範囲（物理）の内容を確認し研究する。カーテンレールやビー玉を用いてどの位の高さから落とせば1周回ることができるかを実験する。

6. 宇宙 柳澤正久（電気通信大学）

宇宙の成り立ちや構成について物理的な観点で調べる。・宇宙の組織（全体）・基本知識・空間時間など

7. 光 小島栄一（電気通信大学卒、T0T0）

光について物理的な観点から調べる。

8. ホログラフィー 梶沢栄基（電通大大学院博士学生）

阿部浩二（電気通信大学）

中・高校生を対象としたホログラフィー作成や理論の説明

9．燃料電池 梶沢栄基（電通大大学院博士学生）中村仁（電気通信大学）

燃料電池のしくみを調べ、実際に実物を作成し電力や従来の電池とエネルギー量の違いなどを調べ利用用途などを考察する

10．光触媒 小島栄一（T0T0）

実験など

11．医学・薬学 榎本秀一（理化学研究所）

医学：再生医療、ES細胞、クローン

薬学：胎盤から薬・宇宙で薬の開発

脳と香り、色、睡眠の関係

12．宇宙 柳澤正久（電気通信大学）

1．宇宙の誕生、2．宇宙の今まで（太陽系、星、銀河）、3．宇宙の今とこれから（宇宙開発、予想図、宇宙センター）、4．宇宙船の中身（生活スペース、機能）、5．宇宙船の構造（しくみ、燃料、概観）

13．化学薬品と環境 榎本秀一（理化学研究所）

- ・環境問題（温暖化・砂漠化・オゾン層破壊、酸性雨）
- ・化学製品（一般的な製品、最先端の製品）
- ・素材の物質（製品の素材、物質）

6. 中学生職場体験実習協力事業

6.1 府中市立浅間中学校

未入稿

7. ボランティア活動支援事業

学生のボランティア活動を支援・促進する「ボランティア活動支援事業」は当部門の事業の中でも重要な位置づけ与えられている。学生諸君が自発的に行うボランティア活動は、大学生時代の貴重な体験として自らの知性の健全な基盤となることが期待されるものであり、また、他方で地域・コミュニティと大学とを結びつける重要な役割を果たすからである。

当部門は、学生諸君の自発性を何よりも尊重し、大学としてはその環境や支援体制を整備するという基本的な考え方のもとに、公平で客観的な情報提供・情報共有が出来るような仕組みを構築することに着手した。システムの開発に当たっては、事務作業が効率的になることと、担当者の事務処理負荷を減少させることも同時に目標とした。

7.1 ボランティア活動支援システム

7.1.1 ボランティア活動支援システムの概要

ボランティア活動支援システムは現在、2つのシステムから成り立っている。

ボランティア活動を希望する学生登録システムと公共団体等を対象とした依頼システムである。

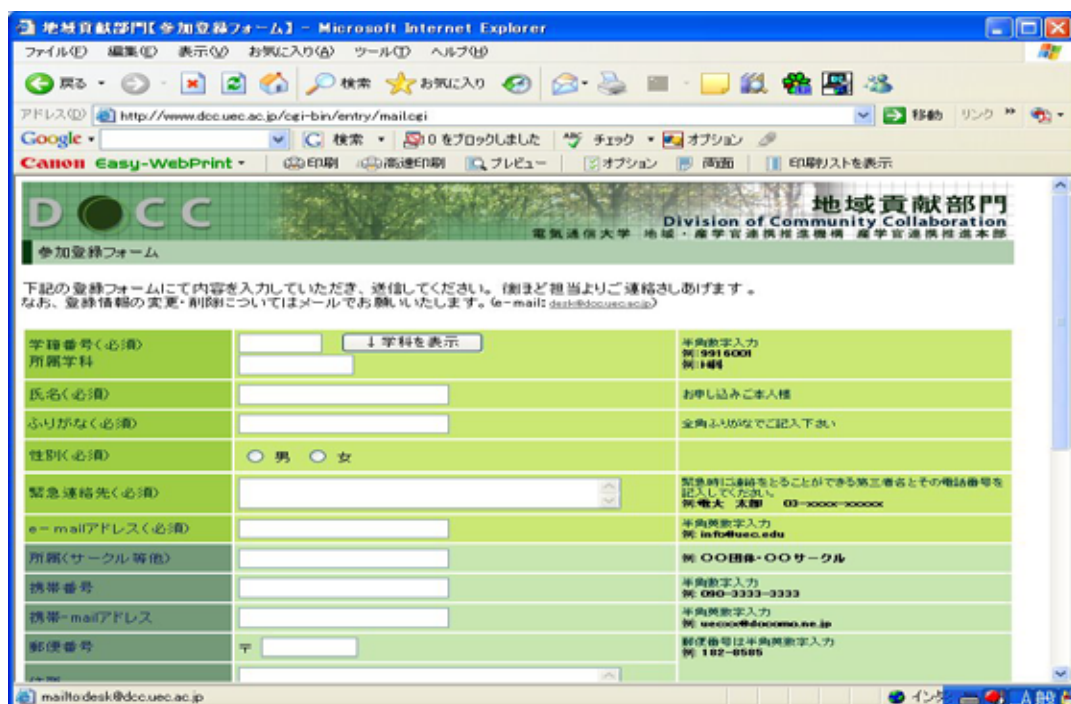
依頼された情報は、ボランティアを希望する学生に配信される。

希望する学生は依頼側に連絡、活動後は報告書を提出することとなっている。

従来は、学生課で掲示等していた情報は、活動を希望している学生へ直接、配信されることとなる。

7.2 ボランティア活動登録システム

平成 17 年 5 月稼動開始、現在 50 名余りの学生が登録している。



地域貢献部門【参加登録フォーム】 - Microsoft Internet Explorer

アドレス http://www.dcc.uec.ac.jp/cgi-bin/entry/mail.cgi

地域貢献部門
Division of Community Collaboration
電気通信大学 地域・産学官連携推進機構 産学官連携推進本部

参加登録フォーム

下記の登録フォームにて内容を入力していただき、送信してください。(制ほど担当よりご連絡させていただきます。
なお、登録情報の変更・削除についてはメールでお願いたします。(e-mail: desk@dcc.uec.ac.jp)

学籍番号(必須)		↓ 学科を表示	半角英数字入力 例: 9916001
所属学科			例: 144
氏名(必須)			お申し込みご本人様
ふりがな(必須)			全角ふりがなでご記入下さい
性別(必須)	☐ 男 ☐ 女		
緊急連絡先(必須)			緊急時に連絡をとることができる第三者とその電話番号を 記入してください。 例: 父 太郎 03-xxxx-xxxxxx
e-mailアドレス(必須)			半角英数字入力 例: info@uec.edu
所属(サークル等他)			例: OO団体・OOサークル
携帯番号			半角英数字入力 例: 090-3333-3333
携帯-e-mailアドレス			半角英数字入力 例: uec000@docomo.ne.jp
郵便番号	〒		郵便番号は半角英数字入力 例: 182-8585

mailto:desk@dcc.uec.ac.jp

7.3 ボランティア依頼システム

平成 17 年 9 月稼動。公的機関等からの依頼をウェブ上から受け付けており、企画書の添付も可能となっている。



地域貢献部門【ボランティア活動依頼フォーム】 - Microsoft Internet Explorer

アドレス http://www.dcc.uec.ac.jp/cgi-bin/request/mail.cgi

地域貢献部門
Division of Community Collaboration
電気通信大学 地域・産学官連携推進機構 産学官連携推進本部

ボランティア活動依頼フォーム

下記のフォームの1、2について内容を入力していただき、送信してください。後ほど担当よりご連絡させていただきます。
なお、登録情報の変更・削除についてはメールでお願いたします。(e-mail: desk@dcc.uec.ac.jp)
「※」がついている項目は必須入力項目です。

1. 申込者(※ご連絡担当者についてご記入ください)		
氏名 *		ご連絡担当者
ふりがな *		全角ふりがなでご記入下さい
所属 *		例: OO団体・OOサークル
e-mailアドレス *		半角英数字入力 例: info@uec.edu
郵便番号 *	〒	半角英数字入力 例: 182-8585
住所 *		

ページが表示されました

インターネット

7.4 ボランティア活動報告

平成 17 年度は以下のような活動を行った。

◎毎月 2 回 発明クラブ

- 4 月 ボランティア登録システム稼動
- 6 月 中学校数学補習ボランティア
- 7 月 中学校補習ボランティア
埼玉県立川越高学校 SPP 支援
- 8 月 埼玉県立川越高学校 SPP
中学校補習補助
中学校補習ボランティア
- 9 月 中学校補習補助
ボランティア依頼システム稼動
- 10 月 中学校補習補助
芝浦工業大学柏中学高等学校 SSP 支援
都立調布養護学校のゲームサポート
汎用イベント参加登録システム稼動
美化ボランティア・フレイイベント F C 東京市民スポーツボランティアへ参加
- 11 月 中学校補習補助
地域貢献シンポジオン第 I 部 美化ボランティア活動
地域貢献シンポジオン第 II 部
地域貢献シンポジオン第 III 部
- 12 月 中学校補習補助
- 1 月 中学校補習補助
中学生職場体験受入事業

7.5 ボランティア活動システム・データベース構築にむけて

ボランティア活動の実績はデータベース化することにより、依頼情報に迅速に対応し、継続的な活動を支援することが可能となる。

また登録者の実績は学内課外活動への表彰推薦の対象となっている。将来、地域貢献に関する大学間の情報や経験、ノウハウの共有などをシステム構築した大学間を連携した支援をするためにも必要である。

在学期間中ばかりでなく、地域を見据えた在住の学生、またOBを対象とすることも視野に入れた支援システムを構築・運用することが望まれる。またそうした活動は地域活性化ばかりでなく、社会システム全体へと効果を現すものであろう。



8. 発明クラブ

8.1 概略

創立 80 周年記念会館を活動拠点とし、目黒会員、退職教員、および現職教員が指導員となって、2004 年 10 月 18 日に開設した。同年 11 月に活動を開始して以来、今までに月 2 回のペースで毎回 30～40 人の地域の小中学生に工作活動、創作活動等を通して、理科の楽しさと発明の喜びを味わわせることができた。

8.2 組織

8.2.1 設立の経緯

本クラブはいきなりできたのではない。実は母体となる「電通大子供工作教室」が、目黒会が中心となって創立 80 周年記念会館 1 階を活動拠点として 2001 年から月 1 回、第二土曜日に開催されていた。この活動の目的は、理科大好きの子供を増やそう、そうすることが電通大に対する応援にもなる、というものであり、その趣旨から毎回参加者を募集していた。

一方、特許庁が 100 周年記念事業として「IP (Intellectual Property) 普及啓発モデル事業」を発明協会に委託して 2003 年度から 3 年間実施することになった。この趣旨は子供たちに知的財産の大切さを伝えるというものであり、各地にある発明クラブのうち賛同するクラブに補助金を交付して事業を展開しようとしていた。然るに東京地区は青少年人口の割りに発明クラブ数が少なく、発明協会としてはいくつかのクラブを新設してモデル事業を展開させることを目論んでいた。

とにかくするうちに電通大子供工作教室の噂が発明協会に伝わり、発明協会から 2004 年 6 月にクラブ新設の打診があった。それまでの方針を変更することになるので、子供工作教室では実施方法等をいろいろと議論した結果、発明協会の趣旨には賛同するが、今までの活動はそれなりに成果をあげているので、工作教室の活動は継続し、その上に発明クラブとしての活動を追加していこうということになった。

発足までの手続きとして次のような段取りを踏んだ。

2004 年 6 月 9 日	発明協会と打ち合わせ
2004 年 6 月 23 日	産学官等連携推進本部運営委員会で報告
2004 年 7 月 7 日	学長に説明
2004 年 8 月 12 日	調布市との打ち合わせ 市、教育委員会、商工会の担当出席、発明協会 からも同席。林会長と長沢研究協力課長出席
2004 年 8 月 31 日	学長、理事等の打ち合わせ会で説明
2004 年 9 月 6 日	目黒会理事下條教授に説明
2004 年 9 月 7 日	役員会で設置を承認
2004 年 9 月 13 日	教育委員会との打ち合わせ。 林会長と長沢課長出席
2004 年 9 月 28 日	市内公立中学校長会で説明。 林会長と長沢課長出席
2004 年 10 月 6 日	市内公立小・中学校教頭会で説明。 林会長と長沢課長出席
2004 年 10 月上旬	募集送付
2004 年 10 月 18 日	発明クラブ開設認可（発明協会）
2004 年 10 月 22 日	申込締切。応募者数 286 名（募集定員 36 名）
2004 年 10 月 30 日	抽選実施。当初会員数は 53 名
2004 年 11 月 13 日	発足式

なお、大学が主体となって設立された発明クラブはこれまでになく、本クラブが初めてである。

8.2.2 組織

会長	林	茂雄（電気通信大学量子・物質工学科 教授）
副会長	安田	耕平（㈱キャンパスクリエイト代表取締役）
顧問	益田	隆司（電気通信大学 学長）
顧問	前田	隆正（(社) 目黒会 会長）

○ 企画運営委員会

委員長	林	茂雄	(電気通信大学量子・物質工学科教授)
副委員長	安田	耕平	(株)キャンパスクリエイト代表取締役)
委員	堀江	正憲	(調布市)
〃	高橋	俊明	(調布市教育委員会)
〃	安立	千鶴子	(調布市商工会)
〃	藤野	馨	(電気通信大学卒業生)
〃	宮下	武重	(電気通信大学卒業生)
〃	下条	誠	(電気通信大学知能機械工学科教授)

○ 指導員 (2006 年度)

有山	正孝	電気通信大学名誉教授、第 9 代学長
石川	洋一	元電気通信大学教授
伊理	武男	電気通信大学大名誉教授
内海	基裕	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
上田	武彦	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
大熊	直彦	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
大嶋	榮生	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
太田	章	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
大村	吉元	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
木下	實	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
草間	篤	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
小林	宏	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
近藤	正士	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
高須	昭彦	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
中田	良平	電気通信大学人間コミュニケーション学科教授
藤野	馨	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
松井	義明	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
松嶋	武彦	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)
宮下	武重	電気通信大学卒業生 (目黒会会員)

八木 克育 電気通信大学卒業生（目黒会会員）

8.2.3 会員構成（2005 年 4 月）

中学 2 年	9 名
中学 1 年	2 名
小学 6 年	7 名
小学 5 年	14 名
小学 4 年	13 名

合計	45 名
----	------

（注 1）2005 年度は新規募集を行っていない。2004 年 11 月からのモデル活動を継続して完遂することを優先したためである。
今後は年度初めに新規募集をすることになろう。

（注 2）今後の募集は、小学 3 年～6 年で行うことになろう。

8.3 クラブ活動

8.3.1 活動形態

2 つの形態からなる。

1）発明クラブ固有の活動

狭い意味のクラブ活動である。月 1 回、課題製作を継続して行うのが典型的な形態である。育成するという意識をもって対応している。

2）工作教室と合同して行う活動

毎回、一般からの参加者と一緒に行う。その日で完結させる。自宅に持ち帰って保護者にほめてもらえるよう配慮している。

8.3.2 活動記録

その他、次のようなイベント参加が特筆される。

- 1) 2005 年 5 月 27 日：発明協会東京支部の総会に林会長が出席。新規発明クラブとして本クラブを紹介した。
- 2) 2005 年 11 月 7, 8 日：発明クラブ全国会議に林会長が出席。「特許庁委託モデル事業」の取り組みについて講演した。
- 3) 2005 年 12 月 3 日：ものづくり体験教室全国大会に本クラブ所属小学 4 年生女子が参加した。
- 4) 2006 年 2 月 11 日：「特許庁委託モデル事業」成果報告会に林会長と長沢研究協力課長が参加し、林会長が講演。＜資料を添付＞

8.4 広報活動およびマスコミ取材

8.4.1 広報

1) ホームページの開設

<http://www.dcc.uec.ac.jp/inv80/index.html> を定期的に更新している。

2) 調布 FM

林会長と藤野指導員が、2004 年 10 月と 2005 年 11 月に出前講座（工作教室）を紹介した。その際、工作教室と同一メンバーが発明クラブを指導していることも話した。

3) 調布電通大どおり

工作教室と発明クラブについて紹介した。

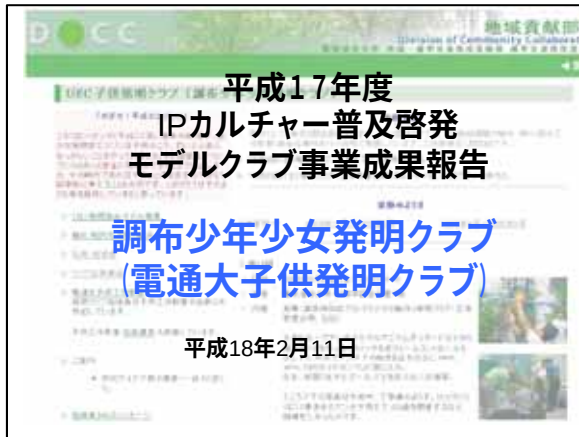
4) 調布祭（大学祭）で作品展示

2005 年 11 月の調布祭で発明クラブ、工作教室での製作品を展示、公開した。

8.4.2 マスメディア取材等

1) 新聞 読売新聞と産経新聞がクラブの発足を報道した。

2) CATV 発足式でケーブルテレビ J-COM の取材を受けた。



1. クラブの概要

報告会 2-11-2006

2

1. 1. 設立の経緯

- **子供工作教室** (2001年11月～)
電通大卒業生を中心とした指導者グループ
毎月1回、小学生対象に実施 (各回完結型)
「理科大好きの子供を増やしたい!」
- IPカルチャー普及啓発事業への勧誘 (2004年6月)
- **発明クラブ**発足 (2004年10月)

報告会 2-11-2006

3

1. 2. 会員数

■ 中学2年	9
■ 中学1年	2
■ 小学6年	7
■ 小学5年	14
■ 小学4年	13
計	45

報告会 2-11-2006

4

1. 3. 指導員



- 電気通信大学卒業生 (目黒会会員) * 16
- 電気通信大学教員 (現職・退職) ** 5

(注) * チーフ指導員2名は卒業生
** 会長は現職教員

報告会 2-11-2006

5

1. 4. 立地環境



- 国立大学法人 電気通信大学に設置
- 実施場所は学内施設
- 大学の地域貢献事業として位置づけ

報告会 2-11-2006

6

1. 5. 活動形態

- 原則として毎月2回実施
- うち1回は発明クラブ単独の事業 (課題製作、講演会など)
- もう1回は工作教室と合同で理科工作
- 2004年11月～2006年1月で27回実施
- 詳細は別紙資料

報告会 2-11-2006

7

2. モデル事業の目的と活動の概要

報告会 2-11-2006

8

2.1. 問題提起

- 小学生や中学生に対して
「知的財産はどんなもの？」
「知的財産がどう社会的に管理されているか (特許制度)」
をどう教えるか？



作る楽しさを味わいつつ学べる場

報告会 2-11-2006

9

2.2. PIPと擬似特許庁で

- ひとりひとりが同じものを製作 (第1段階)
↓
- アイデアを考えさせる (第2段階)
学年ごとに考案・改良・工夫 = Pseudo-IP
↓
- アイデアを指導員に申し出る = 擬似特許庁に登録
↓
- アイデアを取り入れて (PIPのやりとり) 仕上げ

報告会 2-11-2006

10

Pseudo-IP (PIP)

- 知的財産のごっこ遊び
- PIP は価値をもたらす (作品の性能向上)
- 大人社会のIPと同様に
PIP は 保護・交換の対象とする
- PIP に気づくようヒントを与える (ゼロからは何も生まれない)

報告会 2-11-2006

11

2.3. PIPと特許制度

- 登録されたアイデアは他学年に使わせない (PIPの排他性)
- PIPは交換できる (Cross Licence)
- 誰でも使えるPIPもある (指導員が全員に提供するアイデア、無償特許)

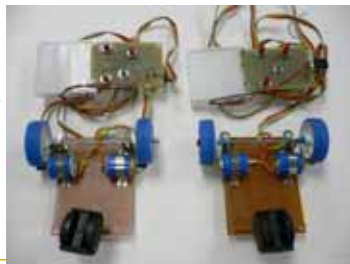
報告会 2-11-2006

12

2.4. PIP を考える素材 (1)

■ ステアリングカー

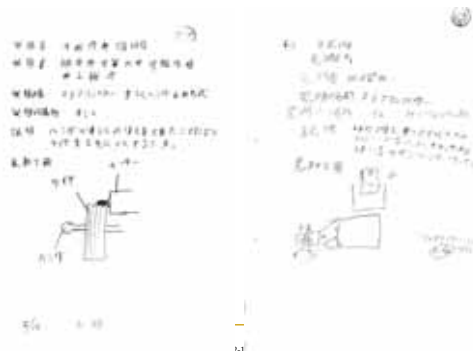
個人製作
タイムトライアル
(競争)参加



報告会 2-11-2006

13

申請書の例



アイデアの例 (特許と登録商標)

◎ 特許一覧

		特許内容				
		モーター駆動器	保護回路改造	スピン停止回路追加	オーバーブース回路追加	
グループ	4年生	ゴムチューブ使用	特許権	保護回路を10kΩに1kΩに変更	左右モータの保護回路を同様に改造	特許権
	5年生	○	○	△	△	○
	6年生	○	○	△	△	○
	中学1年	○	○	○	△	
	その他				○	

(注)

- 権利特許
- △ 権利特許、グループ間で交換可能
- 無償特許、全知の事業以外で指導員がアイデアを提供した、アイデアがいないグループを救済するための留めである。

◎ ニックネーム一覧(登録商標)

毛ノローグ	H. Y. さん(中2)
黒い	A. K. さん(小4)
ムーンライト	H. Y. さん(小4)

報告会 2-11-2006

15

2.4. PIP を考える素材 (2)

■ 光オルゴール

個人製作
紙送り機構の工夫



報告会 2-11-2006

16

2.5. IP を考えさせるための取り組み (1)

工作開始前の講話

- 進歩の歴史を概説 (オルゴール)
- 構成要素やデザインの背後にある科学的要素や工夫 (ねじ、ステアリングカー)
- 類似品の相互比較 (ステアリングカー、ワームマシン)
- 著作権 (曲) とカラオケ使用料に見られる知的財産使用料例 (光オルゴール)

報告会 2-11-2006

17

2.5. IP を考えさせるための取り組み (2)

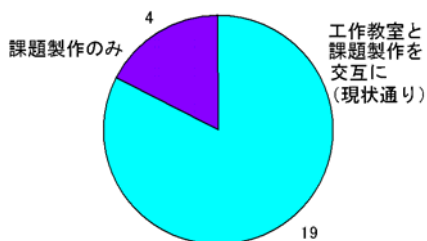
「どこまで認識が進んだ」のペーパーテスト的調査

- 独自の質問票 (アンケート用紙) を2005年11月に配布
- IP講演会のアンケートを2005年12月に実施

報告会 2-11-2006

18

独自アンケートの結果 (1) 実施内容



報告会 2-11-2006

19

独自アンケートの結果 (2)

- 課題製作では、指導員の先生に作り方を教えてもらいました。そして、穴あけやはんだ付けの技術 (道具の使い方) を学びました。しかし、みなさんがいろいろと考えていることや工夫することも大切だと考えています。このことについてみなさんはどんなふうに思っていますか。

- 作り方を教えてもらうことについて
- 技術 (道具の使い方) を学ぶことについて
- 自分で考えること・工夫することについて

(別紙に自由回答)

報告会 2-11-2006

20

独自アンケートの結果 (3)

- ① アイデアはだいたいのものだから、勝手につかうのはよくない。(43%)
- ② アイデアを使っているものができるのだから、だれでも使えるようにしたほうが世の中にいいものがたくさんできてみんなが喜ぶ。(48%)
- ③ アイデアをみんなが使えば、それを考えた人もきつううれしいはずだから、どんどん使ってい。(22%)
- ④ アイデアを考えることがどんなにむずかしいかわかった。そのアイデアを使うのなら、苦労にたいしてお礼をしなければならぬ。(43%)
- ⑤ ステアリングカーにいくらアイデアを取り入れても、やはり運転がじょうずな人が勝つから、アイデアがほんとうに役にたったのであればお礼はなくてもよい。(4%)
- ⑥ 自分たちのアイデアと相手のアイデアを交換するのは、うまい考え方である。(70%)
- ⑦ 自分たちのアイデアとあいてのアイデアを、ものと同じように交換するのは、おかしい考え方である。(13%)

報告会 2-11-2006

21

独自アンケートからうかがえること

- 知的財産についての理解が意外と深まっている (設問3から)

しかし、「ものづくり体験教室 ワームマシン」製作の際に名案が一気に子供たちの間に広まったことを見ると、理屈としての理解であろう

- 本クラブの方針が子供たちに受け入れられている (設問1, 2から)

報告会 2-11-2006

22

2.6. 広報活動

- ホームページ
- 大学祭でのパネル展示と作品展示 (来場者数200名近く)
- マスコミ (ケーブルテレビJ-COM、調布FM)
- タウン情報パンフレット (「電通大どおり」)



報告会 2-11-2006

23

調布少年少女発明クラブのホームページ (<http://www.dcc.uec.ac.jp/inv80/>)



24

3. 特に成果があったと思われる活動

報告会 2-11-2006

25

3. 1. 工作体験

毎月2種類の企画

- 継続課題
PIP を学ぶ場
- 1日完結型教室
不思議体験
達成感



報告会 2-11-2006

26

3. 2. 講演

外部から招待/内部指導員

- IPそのものについて ← 弁理士
- 江戸時代からあったIP ← 江戸からくり
- 現代技術の中のIP ← CT, PET
- 子供の頃のIP体験 ← 指導員
- からくりの現代的意義 ← 指導員

報告会 2-11-2006

27

3. 3. 見学

- 電通大歴史資料館
- 電通大創立80周年記念会館展示室
(ミュージアム)



報告会 2-11-2006

28

4. 苦心した点

- 工作開始前の講話では「早く終わらないかな」という反応が顔に出がち
→ 10分が限界
- 何も知らない中ではアイデアの出ようがない。ヒントを与えることが必要。
→ 工作教室での経験が生きた
- 低学年と高学年混在のむづかしさ。高学年にはプライドがあり知識も多い。

報告会 2-11-2006

29

5. 結論

- IPの話进行全面に出すのは小学生には時期尚早と思われたが、指導員のアイデアおよび発明協会のご指導により、知的財産の大切さについて、意識を持たせることができた。
- 独自のアンケートおよびIP講演会でのアンケート結果から、それが実証された。
- 課題継続型と1日完結型の両面作戦は、かなり成功したのではないかな。

報告会 2-11-2006

30

9. 美化ボランティア事業

地域貢献シンポジオン 2005 の企画の一環として、ボランティア活動の第 1 歩として美化ボランティアを立ち上げた。美化ボランティア活動のノウハウを学ぶために、プレイベントとして F C 東京の市民スポーツボランティア活動に 13 名が体験参加した。

9.1 会合記録

○第 1 回美化ボランティアイベント会合

日 時 8 月 4 日（木）10:30-12:00

- 議 題
- 1 地域貢献シンポジオン第 I 部美化ボランティアについて
学外清掃と空き缶・ペットボトル回収機
 - 2 地域貢献シンポジオン第 II 部事例・研究発表、
第 III 部チャリティコンサートについて
 - 3 美化ボランティア・プレイベント
F C 東京市民スポーツボランティアについて

○第 2 回美化ボランティアイベント会合

日 時 10 月 6 日（木）12:00-13:10

- 議 題
- 1 学外清掃場所
 - 2 美化ボランティア役割分担
 - 3 空き缶・ペットボトル回収機ラッキーチケット
 - 4 サントリー社員ボランティア 200 人受け入れの件

○第 3 回美化ボランティアイベント会合

日 時 11 月 14 日（月）12:15

- 議 題
- 1 清掃箇所、役割分担等運営の確認
 - 2 地域貢献シンポジオン 2005
第 1 部 F C 東京キックターゲット会場設営と運営
について

9.2 組織（メンバー）

阿部 浩二（電気通信大学 量子・物質工学科助教授）

久保田 淳（F C 東京）

森 薫（電気通信大学 情報通信工学専攻修士 1 年）

徳江 潤也（電気通信大学 量子・物質工学専攻修士 1 年）

鳴海 徹（電気通信大学 量子・物質工学専攻修士 1 年）

水野 正博（電気通信大学 知能機械工学科 3 年）

畠山 尚久（電気通信大学 人間コミュニケーション学専攻修士 2 年）

齊藤 梓（電気通信大学 人間コミュニケーション学専攻修士 2 年）

研究協力課

9.3 実施内容

- ・ 10 月 30 日（日）地域貢献シンポジオン 2005 プレイベント
F C 東京市民スポーツボランティア参加
- ・ 11 月 19 日（土）地域貢献シンポジオン 2005 第 I 部美化ボランティア（学外周辺清掃）
- ・ 11 月 19 日（土）地域貢献シンポジオン 2005 第 I 部空き缶・ペットボトル回収機ラッキーチケット景品交換担当
- ・ 11 月 19 日（土）地域貢献シンポジオン 2005 第 I 部 F C 東京キックターゲット担当

10. その他事業

10.1 花植え事業

10.1.1 事業開始の経緯

平成 14 年 9 月から 12 月に、市民を対象とした、まちづくり講座「まち創造塾」が開かれた際、そのまとめとして市民から出された提言の 1 つに「住みたいまち、花のある調布」というものがあった。これに対し、この塾に出席していた当時の梶谷誠学長が「是非、大学内に花を植えてほしい」と要望され、実現する運びとなったもので、平成 15 年 6 月から、春・秋の 2 回、花植え作業が行われている。

10.1.2 事業内容

調布市民ボランティアグループ「調布 花・はな」による花植え事業は、平成 15 年度にスタートしたもので、平成 17 年度も春・秋の二回、花植え作業が行われた。花植え作業は、本部棟玄関前広場の花壇で、教職員・学生も加わって行われたが、花・はなグループではこの他、保健管理センター北側の学生が集う広場の池周辺にも花植えを行った。また、花・はなグループには、五思寮（学生寮）のプランターの花植えについても協力いただいている。

春（6 月 23 日実施）



秋（10 月 22 日実施）



第1回 6月23日(木)10:00-11:00 参加者:教職員20名, 学生6名

第2回 10月22日(土)9:30-10:30 参加者:教職員4名, 学生21名

花植え作業の第1回では、益田学長が参加され、ボランティアグループに謝辞が述べられた。また、教職員、学生合わせて26名参加し、サルビアやマリーゴールドなどの花が植えられた。

第2回目は土曜日ということもあって、教職員の参加は少なかったものの、逆に学生が多数参加した。チューリップやパンジーの球根を植えることは初めての経験という学生が多く、グループの方々の指導を受けながらの作業は、グループと学生の交流の場となり、大変有意義なものとなった。

10.2 三鷹ネットワーク大学

平成15年度から三鷹市の企画部を中心に検討されていた「三鷹ネットワーク大学・大学院」は平成16年「三鷹ネットワーク大学(仮称)」開設協議会として検討を進めた結果、平成17年5月に参加14教育・研究機関の長と三鷹市長を理事とする特定非営利活動法人「三鷹ネットワーク大学推進機構」の設立総会が開催され、平成17年10月1日に市民、教育・研究機関、事業者、三鷹市の協働による、「地域の新しい学びの場」である「三鷹ネットワーク大学」として開設された。

本学は当初から参加協力をしており、平成16年度の事業である「三鷹ネットワーク大学(仮称)」プレ開講地域ケア連続講座「住み続けるまち・三鷹での地域ケア」には開設協議会実務者の一人であった電気通信大学共同研究センターの田口助教授が講演を行った。

平成17年10月からの第1学期には三鷹ネットワーク大学参加の14教育研究機関の学長等による三鷹ネットワーク大学開設記念特別講座「知的創造空間としての地域社会」が全17回にわたって開催された。本学益田隆司学長も講演した。

国立大学法人化に伴う地域・産学連携推進機構の発足により本学の

三鷹ネットワーク大学への対応は産学官等連携推進本部地域貢献部門の担当となり、同本部リエゾン部門（共同研究センター）の田口助教授が連絡担当となっている。

国立大学法人 電気通信大学
産学官等連携推進本部
地域貢献部門
<http://www.dcc.uec.ac.jp/>